

「第3部会」主な意見等の整理(第1回～第3回)

10年後のあるべき姿・目標(どんな杉並区民に育てほしいか)キーワード例⇒「循環」、「つながる」、「育む」、「自立」、「発見・創造」、「受信・発信」、「地域と密着・協働」

すべての子どもへの切れ目のない成長・学びの支援

【子育て、子育て】

- 安心して子育てできる環境整備
- 子育て家庭が相互に話し合う場の整備
- 子育て中の親が抱える問題とその支援
- 保育園・学童クラブ待機児童の解消
- 就学前教育・保育と幼保一体化
- 障害のある子どもの自立と支援
- 就学前と学校の接続
- 児童虐待の防止

- 働く母親が地域の中で不安なく生活できるよう、相互に話し合う場を設ける必要がある。
- 杉並区は、保育園の待機児童解消に積極的に取り組んでいるが、一方で財源という問題もあり、民間活力の活用を含めた対応を図る必要がある。
- 国は幼保一体化の推進を掲げるが、杉並の私立幼稚園には広がっておらず、区独自の推進策が必要。
- 小学校入学前の保育園・幼稚園・その他の子育て施設において、成長過程に即した就学前教育が大切である。

- 生きる力・考える力・行動する力を培う
- 知力、体力を整える教育環境の整備
- 教師と家庭の教育力の一層の向上と支援
- 小中学びの連続
- 特色ある学校教育の推進(言葉の教育等)
- 発達障害児の自立・学びと支援
- 無気力な子、ニート⇒若者の自立

【学齢期以降】

- 「杉並で教育を受けると将来はこんな人に育つ」というような目標を設定して、皆で共有できると良い。
- 無気力な子どもやニートにならないための取組として、自分の価値観を高める教育が大事だと思う。
- 子どもの基礎学力・生きる力を培うためには、人間関係能力やコミュニケーション能力を高める取組が必要であり、学校の中に、世代間の交流とか異文化の交流、ボランティア活動など、様々な人との関わりを積極的に取り入れていくことが求められる。
- 生きる力・考える力を培う取組として、現在各学校で実践されている「特色ある教育活動」を一層活用すべき。
- 子どもたちに、生きる力・考える力・行動力を備わせるためには、子どもに豊かな経験をさせるとともに、親自身の教育も必要。
- 特色ある教育という中で、外国語活動や国際理解教育などを区が教育の目玉として力を入れて取り組んではどうか。
- 発達障害や障害と認定されないいわゆるグレーゾーンの子どものについては、早期対応が重要である。
- 小中の連携はとても重要で小中一貫教育は今後も必要な取組である。さらに、高等教育とのつながりも視点に入れて取り組む必要がある。
- 教師の役目はとても重要であり、教員の養成や力量の形成に引き続き取り組む必要がある。

地域の子育て力・教育力・文化力の創造とつながり

【地域】

- 地域の中での子育て・教育・自立支援
- 地域の身近な文化・創造活動の発掘と支援
- ボランティア活動と世代間交流の活発化
- 日本文化と異文化の相互理解、共生社会の実現
- スポーツ振興と区民の健康増進、生涯学習成果の社会的活用
- 平和な世界の実現、男女共同参画社会の構築

- 高齢者や専門的な技術・技能を持つ区民など、地域に多数存在する人材や企業を発掘し、循環・継承させるシステムが必要だと思う。
- 杉並の各地域には潜在的な様々なポテンシャルがある。今後は、新しいことを始めることだけでなく、眠っている地域の力の発掘・発見、育成・創造、継承・発信する観点が重要。
- 地域の人子どもたちとかかわりをもつことで、喜びを感じる事が大事。それが、取組の継続性や広がりにつながると思う(知の循環型社会の構築)。
- 基本構想における文化の位置付けは、高邁かつ抽象的なものではなく、より具体的な施策や道筋を踏まえたきめ細かな配慮(地域性・世代・領域等の場面での違い)が必要。
- これからの公共と文化の関係は、現場で地域と行政と専門家が協働していくような体制をつくらないといけない。
- 基本構想の中で、「杉並の子ども文化を開かせよう」とか「子どもスポーツを開かせよう」というような重点的な視点というのを持つべきだと思う。
- 共生社会の実現に向けて、他文化理解のための日本文化の理解が必要であり、また、コミュニケーションという側面からの日本語と外国語教育が大事だと思う。
- 今後、小・中学校の施設更新にあたっては、子どもの視点だけでなく、広く区民が利用しやすい施設として有効活用できるように整備することを検討すべき。
- 今後のスポーツ振興を世代間交流等を絡めながら進めることで、健康増進という側面のほか、青少年の健全育成(マナーを含む価値観を高め・育む)が図られるのではないかと(タテヨコ社会でない斜めの関係の体験が必要)。
- 生きる力・考える力・行動する力、さらに社会力や人と共存していくことなど、子どもたちが自然に学ぶ場を設ける必要があり、例えば「放課後子ども教室」は有効な取組の一つである。